

ルーマンにおける社会の存在論的地位

大阪大学 下山惣太郎

1. 目的と方法

社会はそもそもどういったものであり、いかにして成立しえているのか。ルーマンの理論はこのような問題意識から出発し、非常に特異な主張を導いている。まず、社会と他の物（物質的、精神的なものも含む）を同列に語っているということが挙げられる。これは発話や人間の行動を前提として、そこから秩序だった社会がどのように生まれたのかという研究とは根本的に異なる。ルーマンは秩序だっていない社会の成立をも理論の対象に含んでいるのであり、そして社会が社会とみなされなくても成立するような理論を構想しているのである。原始的なコミュニケーションや原始的な社会すら、それが現にあるということからスタートしてはいけない。ルーマンが一般システム理論の話をする時、彼は社会に限らないより一般的な対象に関する存在論をしているのである。そこで問われているのはものはいかにしてあるのか、という伝統的な哲学の問いである。しかし一方で周知の通りルーマンは社会学者であり、社会について語る。それを追えばすぐにルーマンの存在論において社会が重要な位置にあることが分かるだろう。それは哲学者による人間の意識や言語に関する研究と関わるが、決して還元されない。なぜならルーマンにとって人間の意識は社会の作動とは無関係であるし、言語は社会のようなシステムと呼ばれるものが存在して初めてありうるものだからだ。とすればルーマンの理論には、存在一般について考えてきた存在論と社会について考えてきた社会学の双方を結び合わせたうえでお互いに有益な知見を与えるようななにかが秘められているということは間違いないだろう。

これを踏まえ、本報告ではルーマンの理論において社会というものがどんな立場にあるものなのか、特に存在論的にどう特殊だと見なされるような場所にあるのかということ、ルーマンのテキストから離れないようにしつつ明確にすることを目的とする。これは同時にルーマンを読む上での中心点の提案にもなるし、社会学と哲学の一つの重要な接点を指摘することにもなるだろう。

2. 結論

ルーマンの理論における社会の立場は、次の二つの水準から明らかにされる。

一つは社会を含むある存在するものの種類、ルーマンのいうところのオートポイエーシス・システム一般に関する水準である。ルーマンの主張によればこのシステムは他なるものに依存せず、自己自身によって成立するようなものである。哲学における実体に関する議論を補助線とすると分かりやすくなるのだが、それ単独で存在することができるものはこうした特徴をもつもの以外ではありえない。そのためシステムは、システム以外の物とは明確に分離され、かつその他のものを依存させるという存在論的に重要な特徴を持つということが言える。

もう一つの水準では社会独特の重要性を明らかにする。この重要性は一般に記述はすべて社会の要素であるという点にある。学問という場は記述無しには機能しないが、これは学問がどんな形であれ社会に必ず巻き込まれているということの意味している。そのため学問にとって社会システムの存在は疑うことができない。こうした意味で社会は学問が第一に探求しなければならない対象であるということをルーマンの理論は主張していると言える。

文献

Niklas Luhmann: Soziale Systeme, Frankfurt am Main, 1987, c1984

—Die Gesellschaft der Gesellschaft, 1. Aufl, Frankfurt am Main, 1998